

令和 6 年能登半島地震発災時における透析患者の緊急避難対応を振り返る

公立能登総合病院

大松 由香子

令和 6 年能登半島地震では震度 6 強の揺れに襲われた。壁や天井が一部破損し、室内が粉塵で真っ白だった。浸水や透析機器の停止から治療の継続が困難となり、緊急避難を行った。警報音が鳴り響く中、スタッフは声を掛け合いながら普段のトイレ離脱と同様の方法で緊急離脱を行った。独歩・護送患者の避難経路が異なるためスタッフは二手に分かれて誘導し、全員が正面玄関に集合した。速やかに、安全に離脱を行うために逆流防止弁付穿刺針は有用であった。避難するにあたり、避難経路や持ち出し物品の把握不足や物品が劣化するなどの管理不足があった。今回の体験から持ち出し物品は避難時の動線を考慮した配置へと見直し、定期的に防災訓練を行いスタッフ全員が対応できるように教育が必要である。